白梅学園短期大学紀要　**41**：57～64（2005）

「カタカナ英語」の氾濫と英語学習のあり方

―― 小学校の教科書分析から ――

瀧口　　優

1．はじめに

平成10年実施の学習指導要領によって，小学校の総合的な学習の時間に外国語会話としての英会話が導入され，全国でほとんどの小学校が何らかの形で英語を導入している。週に1回取り組んでいるところもあれば月に1回，学期に1回などというところもあり，それらを含めての「ほとんど」であるから，実際にどの程度英語の力に結びつくのかは疑問である。

最大の成果は多くの親や子どもたちを塾に向かわせたということであろうか。学校で教えてくれる英語についていけなくては「困る」ということで既に多くの小学生が塾で英語の勉強をはじめた。

一方，日本の社会を見渡してみれば，生活のあらゆるところに英語が入り込み，新聞や雑誌，そして街の看板類や広告など，英語が氾濫している。英語がそのまま入ってくる場合もあるが，多くは英語の音をそのままカタカナにして使っている例が多い。行政の文書などはカタカナ英語が洪水のように使用され，英語に触れる環境の少なかった年配の人たちは，言葉そのものが理解できないで，せっかく行政が実施している事業を受けないでいることもあるという。わざわざ老人たちが利用しにくいようにカタカナ英語を使用しているというううがった見かたもないわけではない。

さて今回，カタカナ英語が氾濫しているという状況の中で，小学校ではそのカタカナ英語がどうなっているのかという関心から，教科書の調査を実施してみた。その結果を踏まえて，小学校における英語教育のあり方を考えてみた。

2．小学校の教科書を調査する

小学校1年から6年まで，正規の科目として教科書の中にどの程度の英語が使われているのだろうか。以下一覧にしてみた（表1）。

Masaru TAKIGUCHI：Overflow of Katakana English and what English learning shoud be ―― through the research on the textbooks used in elementary schools ――

表1　小学校教科書（04年4月現在）におけるカタカナ英語数

	教　科	冊　子	出 版 社	カタカナ英語数
1	国語	1年上	東京書籍	0
2	国語	1年下	東京書籍	10
3	国語	2年上	東京書籍	24
4	国語	2年下	東京書籍	26
5	国語	3年上	東京書籍	31
6	国語	3年下	東京書籍	34
7	国語	4年上	東京書籍	24
8	国語	4年下	東京書籍	24
9	国語	5年上	東京書籍	32
10	国語	5年下	東京書籍	47
11	国語	6年上	東京書籍	39
12	国語	6年下	東京書籍	55
13	社会	3・4年上	日本文教出版	34
14	社会	3・4年下	日本文教出版	48
15	社会	5年上	日本文教出版	47
16	社会	5年下	日本文教出版	75
17	社会	6年上	日本文教出版	23
18	社会	6年下	日本文教出版	42
19	算数	1年	東京書籍	3
20	算数	2年上	東京書籍	12
21	算数	2年下	東京書籍	16
22	算数	3年上	東京書籍	32
23	算数	3年下	東京書籍	21
24	算数	4年上	東京書籍	45
25	算数	4年下	東京書籍	21
26	算数	5年上	東京書籍	29
27	算数	5年下	東京書籍	16
28	算数	6年上	東京書籍	19
29	算数	6年下	東京書籍	28
30	理科	3年	東京書籍	22
31	理科	4年上	東京書籍	13
32	理科	4年下	東京書籍	27
33	理科	5年上	東京書籍	9
34	理科	5年下	東京書籍	27
35	理科	6年上	東京書籍	16
36	理科	6年下	東京書籍	32
37	生活	1・2年上	学研	7
38	生活	1・2年下	学研	6
39	図画工作	1・2年上	日本文教出版	18
40	図画工作	1・2年下	日本文教出版	27
41	図画工作	3・4年上	日本文教出版	39

42	図画工作	3・4年下	日本文教出版	40
43	図画工作	5・6年上	日本文教出版	45
44	図画工作	5・6年下	日本文教出版	30
45	書写	1年	大阪書籍	6
46	書写	2年	大阪書籍	14
47	書写	3年	大阪書籍	4
48	書写	4年	大阪書籍	9
49	書写	5年	大阪書籍	21
50	書写	6年	大阪書籍	5
51	音楽	1年	教育芸術社	6
52	音楽	2年	教育芸術社	8
53	音楽	3年	教育芸術社	14
54	音楽	4年	教育芸術社	20
55	音楽	5年	教育芸術社	24
56	音楽	6年	教育芸術社	25
57	保健	3・4年	学研	7
58	保健	5・6年	学研	39
59	家庭	5・6年	東京書籍	71
計				1488

＊小学校の教科書は教科によって6社とか7社から出版されていることもあれば，2社だけという教科もあり，本来ならば全ての教科書検討の対象にすべきであるが，学習指導要領に沿って作られているので，それほど大きな違いは出てこないという観点から1種類ずつ選んだ。

小学校の教科書は必ずしも学年でうまく区切ることができるようにはなっていないものもある。図画工作のように学年をまたがりながら，更に上下にわかれている場合などはどのように分類したらよいのか迷うところである。いずれにしても59種類が発行されており，すべてが各教科の授業での使用の対象となるので，生徒は1年から6年までのあいだに，この全てを使うことになる。

3．小学校教科書の中のカタカナ英語

59種類の教科書に登場するカタカナ英語は延べ語数で1488にのぼっているが，同じカタカナ英語がいくつかの教科書に使われているので，異なる語数としては647である。言い換えれば小学校の教科書を完全に理解するためには647語の英語がわからなければならないということになる。

中学校の3年間で学ぶべき英単語が平成10年の学習指導要領で100語に限定されたのは論外としても，それ以前の文部省学習指導要領でさえ500語前後しか指定していなかったことを考慮に入れると，647語がいかに多い数であるか理解できるであろう。

上記各教科書に登場するカタカナ英語をまとめて学年ごとに振り分けたのが以下の表2である。2学年にまたがる教科書の場合は前半の頁を下位学年に入れ，後半の頁を上位学年に入れて計算した。

表2　小学校1年生の教科書に登場するカタカナ英語

カタカナ	英　語	学年・教科	出現頻度	学習学年
クイズ	quiz	1・2下生活	8	1
ジャンプ	jump	1・2下生活	4	1
ステージ	stage	1・2下生活	3	1
リズム	rhythm	1・2下生活	11	1
カード	card	1・2上生活	19	1
コンピュータ	computer	1・2上生活	13	1
ステンドグラス	stained glass	1・2上生活	3	1
プレゼント	present	1・2上生活	8	1
ページ	page	1・2上生活	33	1
クレヨン	crayon	1・2図工	7	1
タオル	towel	1・2図工	3	1
パーティー	party	1・2図工	4	1
パス	pass	1・2図工	3	1
バッグ	bag	1・2図工	2	1
ホームページ	home-page	1・2図工	15	1
ランプ	lamp	1・2図工	6	1
ローラー	roller	1・2図工	4	1
ケース	case	1・2年下図工	3	1
ゴール	goal	1・2年下図工	7	1
シート	sheet	1・2年下図工	6	1
ストロー	straw	1・2年下図工	6	1
マーク	mark	1・2年下図工	7	1
カスタネット	castanet	1音楽	2	1
シンフォニー	symphony	1音楽	1	1
タンブリン	tambourine	1音楽	2	1
トライアングル	triangle	1音楽	3	1
ハーモニカ	harmonica	1音楽	2	1
エプロン	apron	1書写	1	1
オルガン	organ	1書写	2	1
ジュース	juice	1書写	11	1
ヨット	yacht	1書写	2	1
サラダ	salad	1年下国語	3	1
スプーン	spoon	1年下国語	5	1
トラック	truck	1年下国語	8	1
バス	bus	1年下国語	8	1

ピアノ	piano	1年下国語	5	1
フェリーボート	ferry-boat	1年下国語	1	1
ホース	hose	1年下国語	2	1
ポンプ	pump	1年下国語	1	1
ケーキ	cake	1年算数	5	1
ゲーム	game	1年算数	10	1
スタート	start	1年算数	5	1

各学年ごとの数は以下の通りである。

小学校1年　42　　小学校2年　81　　小学校3年　100
小学校4年　115　　小学校5年　140　　小学校6年　169

4．カタカナ英語と英語教育

さて，カタカナ英語と英語教育の関連についてまとめてみたい。

まず，カタカナ英語をどう考えるかであるが，実際に「カタカナ語・略語辞典」（岸本，1998）（過去には「外来語辞典」と表現していた）では2万語から3万語が取り上げられている。ちょっとした英和辞典が4万語から5万語（柴田，1997）であることを考えると，いかに日本の「カタカナ語」が多いのか理解できよう。しかもこうしたカタカナ語のうち，90％以上が英語からとられたものであるので，当然のことながら，カタカナ英語と英語教育，英語学習の関連が問題となってくる。

かつて高校の英語以外の教科書にどれだけ多くのカタカナ英語が登場しているのか調査する機会があった。1996年度に普通科の高校で使用されている教科書が対象であったが以下のような数字が出されていた（瀧口，1997）。

表3　高等学校各教科におけるカタカナ英語の数

国語科	現代文	60	数学科	数学Ⅰ・Ⅱ	45
社会科	現代社会	161	理科	生物B	93
	地理	151		地学	89
	日本史B	52		化学B	85
	世界史	69		物理B	125
	政治経済	95	保健体育科	保健体育	158
	倫理	74	音楽科		243
	美術	172	家庭科	家庭一般	299

延べ数は1971語で，異なる語数としてはおよそ1200語になり，高校の教科書を普通に読んで理解するためには1200語の英語がわからなければならないという数字が明らかになった。

日本語を学習する，あるいは日本語を通じて何かを学ぶという時には，この1200語のカ

タカナ英語は別の問題を提起する。教科書に登場していないカタカナ英語を含めればこの数は更に拡大するので，新聞や雑誌をほぼ理解できるようになるためには一体どのくらいのカタカナ英語を理解できなければならないのだろうか。高校生が中学校から6年間で学ぶべき英語の語彙が，現在では2500語未満[1] になっているが，その数に近い数字が出されてくるのであろう。

したがってカタカナ英語と英語学習という立場でこの問題を考えると，これほど多量に登場するカタカナ英語をどのようにして英語として身に付けさせるのかということである。残念ながらこれだけ身近に英語が登場しながら，子どもたちにとっては英語として認識されないため，言葉の意味もわからないまま教科書に対応しているという実態がある。

更に子どもたちの周りには学校の教科以上に「カタカナ英語」の世界が広がっている。テレビやテレビゲーム，マンガ，音楽，映画，携帯電話等など，あげればきりがない。これらをきちんとした英語として位置づけることができないだろうか。

外国語教育学会では2001年に「カタカナ外国語（英語）と外国語（英語）教育」についての研究会を開いているが，その開催主旨には「小学校への英語学習導入により，カタカナ発音がにわかにクローズアップしてきました。なぜなら小学生には発音記号は読めないし，耳からの音声入力だけでは記憶や再生に限界があるからです」とあり，「カタカナ外国語の現状と教育的利用」「カタカナ英語で英語ラクラク学習」「カタカナで英語は発音できる」等，積極的な活用が提起されている。また，ジョン万次郎の逸話「英語を耳で聞いて育った彼は，英語を聞こえるままに丹念にカナに置き換えていった...」（池谷，2003）を紹介して，カタカナの活用による英語学習を提起しているものもある。英語の辞書でも発音をカタカナ表記にしたものが数多く書店に並んでいることも事実である。高校の英語教科書に発音のカタカナ表記が登場して話題となったのは1990年である。

こうした流れから考えれば，英語学習においてカタカナ英語をもっと有効に活用すべきであるという論が成り立つし，私自身も定時制高校などの体験から，その活用についての可能性を認識している。

5．カタカナ英語の問題点

以上述べたように，小学校ですでに600を越える英語が教科書に登場し，中学校や高校の教科書を考慮に入れると相当数の英語が日本語を通じて取り入れられている実態やカタカナ英語が生活の中に入り込んでいる状況，更には英語教育にカタカナが活用されるようになっている事態を踏まえて，考えなければならない点がいくつか指摘される。

まず第一に，日本語そのものの豊かさをどのように守っていくのかということである。

1）文部科学省『学習指導要領』2002年

「さらに，仮想化エンジン機能が，異機種統合環境においても大きなベネフィットをもたらします。企業内のストレージ環境とITインフラを統合し，TCO削減に直結する…オンデマンド・ビジネスのトータルなソリューションです」[2] などという宣伝広告文は特に珍しいものではないが，ここに登場する「ベネフィット」「ストレージ」「オンデマンド」「ソリューション」などは英語として取り上げても決して易しいものではなく，それを交えた日本語はすでに理解不能な文として一人歩きしている感もある。

かつて明治時代に英語をカタカナとして取り入れることが日本語の新たな展開としてもてはやされた時期もあった。しかしそれはやがて沈静化し，できるだけ日本語として翻訳する努力がすすめられて，日本語の豊かさが守られてきたという経緯がある。そうした過去の歴史からすると今日の事態は極めて憂慮すべきことといえる。

2004年10月，国立国語教育研究所がカタカナ語の言い換えについて案を発表した。数万にものぼるカタカナ語からすれば「大海の一滴」にしかならないし，遅きに失した感はあるが，やらないことに比べれば「進歩」と言えないこともない。

第二として「発音」の問題がある。「ベネフィット」などはもとの英語「benefit」の発音からすると離れているので，実際に英語として使うときには英語発音をきちんと身に付けなければならない。

第三として，安易なカタカナ語依存による意思や情報の交流不全の問題がある。経済や政治，あるいは福祉に至るまで地球一体化した世界の中で，様々なものが外国から入り込んでくる。それをそのまま持ち込むことによって，理解不十分な言葉が日本社会に浮遊することになり，ちょうど分厚い視聴覚関連の解説書のように，読んでも分からないものがここかしこに散乱する事態が進行する。

6．終わりに

こうしたカタカナ語の氾濫に対してどのように対応していったらよいのだろうか。宇野喜伸（1998）は次のように提起している。

第一には，少なくともお年寄りを対象とした福祉関係の施設や設備，行事などにカタカナ語の濫用は厳にいましめるべきである。

第二には，官庁は解説をしなければわからないようなカタカナ語を率先して使うべきでない。できるだけみんながわかる言葉を使ってほしい。

第三に，公務員だけでなく，社会的に指導的な立場や，影響力の強い立場にある人も同様である。

第四に，全く同じ意味の日本語があるのにわざわざカタカナ語を使う必要はない。

2）日本経済新聞 2004. 10. 21

第五に，元の外国語の意味とひどく違う意味のカタカナ語も避けたいもの。

今回の調査によって，小学校の教科書が安易と言わないまでも数多くのカタカナ語を導入しており，それによって宇野氏が指摘している問題を拡大するのではないかという懸念を表明しつつ，日本語をどのように豊かに発展させていくのかという課題が問われているということが見えてきた。時間はかかっても日本語で表現できるものは意識して日本語で表現し，日本語に存在しない新しい概念の言葉については，協力して新しい日本語の表現を生み出していく努力をすることが今問われている。

日本における英語教育が安易なカタカナ語の氾濫にのるのではなく，一つ一つのカタカナ語をその英語をもとにして日本語に置き換えながら確認していく作業を通じて，英語を学ぶと同時に日本語を豊かにしていくことに貢献できるのではないか，とりわけ小学校の英語教育がすすめられるとしたら，まずそこにこそ光が当てられなければならないと思う。そのことを指摘して本稿のまとめとしたい。引用語以外にカタカナ語を使用しないで文章を書くことの大変さを意識させられた論題である。

文　献

池谷裕二（2003）『魔法の発音　カタカナ英語』講談社

宇野喜伸（1998）『カタカナ語を考える』かもがわ出版，p.54

岸本重陳（1998）『カタカナ語・略語辞典』旺文社

柴田徹士（1997）『Victory Anchor』学研

瀧口優（1997）「高校教科書に氾濫するカタカナ英語」新英語教育　337号　三友社出版

たきぐち　まさる（英語教育）